

42. 脳神経内科の最近の動向について

獨協医科大学 内科学（神経）

大沼広樹，鈴木圭輔

【目的】昨今の新型コロナウイルス感染拡大を受け，臨床実習でも一定の制約を余儀なくされた。元々，学生の過半数はCCの1週間が唯一の脳神経内科の経験機会であるため，学生に及ぶ影響として，脳神経内科の認知度低下，神経診察への苦手意識の増加が懸念された。

今回，教育の方向性について検討するべく，当科の教育分野（特に臨床実習）の取り組みについて，予定しているアンケート調査を含め，動向を報告する。

【方法】当科としては初めて，Webを利用したアンケート形式で，教務課，教学IRと連携の上，学生を対象とした実態把握を計画した。対象は医学部4，5，6年生とした。その他の活動として，獨医祭や医局説明会で当科の実績を報告する。

【結果】今回の発表には回収・集計は間に合わなかったが，今後，集計結果を踏まえ，実習内容のブラッシュアップはもちろんのこと，座学での講義や，OSCE前実習なども学生に関わる貴重な機会と考え，教育方法を工夫していく方針である。

【考察】当科のみでは限界があるため，他の診療科との連携強化や，低学年の教育を行っている基礎系分野の先生方との連携も必要である。活動の評価として，中・長期的には，模擬試験などで神経領域の得点率の向上を把握する方法を考えている。また，卒業生の4割は当大病院に就職する状況を踏まえ，卒業生に対するアンケート調査や実態調査も必要と考える。

【結論】当科の教育分野の課題・取り組みを報告した。今後も継続的な活動，評価，報告を行っていく方針である。

43. K-43 神経変性疾患の鑑別診断におけるMRI計測の検討

獨協医科大学 埼玉医療センター 脳神経内科

沼畑恭子，小川知宏，尾上祐行，赤岩靖久，滝口義晃，宮本智之

【目的】神経変性疾患におけるMRI画像における鑑別診断の計測法には種々報告されている。

今回その中で，2019年に佐光らが提案したone-line methodを当センターの症例について追試の検討をしたため報告する。

【方法】2013年4月から2019年3月まで当センター越谷クリニックでMRI検査を施行した基礎疾患あるいは認知機能障害のない健常者55例，神経変性疾患46例を対象とした。

神経変性疾患の内訳はパーキンソン病26例，進行性核上性麻痺8例，大脳皮質基底核変性症候群5例，多系統萎縮症5例，脊髄小脳変性症2例。

計測方法としては，MRI・VSRADの撮像条件で施行したT1強調画像の正中矢状断1スライスを用いて中脳径と橋径を測定し，各群で比較検討を行った。

【結果】評価者内，評価者間の信頼性を評価したところ，ICCはいずれも0.7以上であり，信頼性が高いことを確認した。中脳径，橋径は健常者においては健常者において各年齢層で大きな差はなかった。中脳径は進行性核上性麻痺で，橋径は多系統萎縮症で，他の神経変性疾患と比較し小さかった。中脳径と橋径の比率に関しては進行性核上性麻痺で小さく，多系統萎縮症で大きくなっていった。

【考察】過去に報告されてた水平断の前後計測は，断面の高さや角度が撮影ごとにばらつきが生じやすく，再現性に乏しいことが考慮され，神経変性疾患の診断に重要な経時的な評価が困難であると考えられた。今回の計測で，One-line methodは評価者間で差がでにくく，簡便に測定できる評価法であることが確認できた。今後，進行性核上性麻痺や多系統萎縮症のサブタイプあるいは神経疾患の睡眠障害の合併の有無による違いを評価することが我々の今後の課題である。

【結論】One-line methodは神経変性疾患の鑑別診断において簡便で診断能が高く，信頼性の高い測定法であることが確認できた。